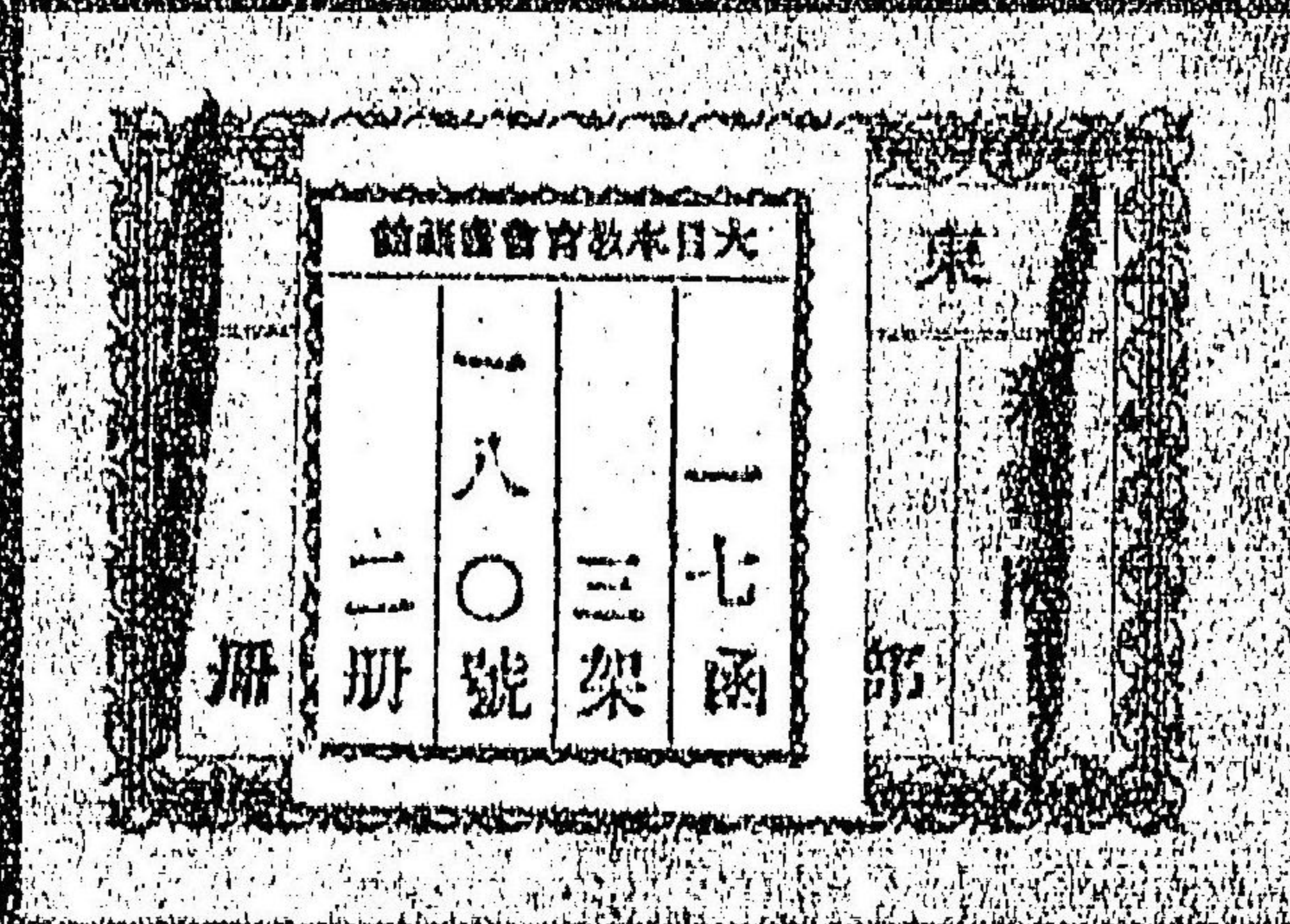


祭典略解

上

特35

799



014075-001-9

特35-799

祭典略解

勝山 健雄 (勾摠舎) / 編

1冊(上27丁)

M16-17

ABB-0331





勝山健雄著  
久保季茲閱

# 祭典略解

明治十六年十二月 勾璉舎藏

特 85  
799

寶龜七年の勅は祭祀神祇國之大典若不誠敬  
何以致福とあるは畏るべきとけにせることよ  
まむあるをその誠敬をむいあよしてか得ら  
るべき禮式をもと法則乃まよくよあへむ  
とりおあまはむはいふも更あまよくその祭  
る由縁と神乃おいさせとをうまくとせと里得  
るに何らでは誠敬の心もおあまがよあるべ  
くやそもく世は神祭の式をもまよ祭文な  
と記して初々した人のよめとせる書とよあ  
れこれ何るが中よ其祭祀の由縁など古典に



徴し考へねをよるに説明し加乃誠敬の心を  
起さしむべき可美書はこ乃勝山ぬしの祭典  
略解にぞ阿るべきよとび此をお乃をよ見せ  
て一言あるきそへよといはるゝに拙きお乃れ  
おのる傳るはといなまるゝものうら切なる  
もとめ乃いなみおとくてかくなむ

明治十六年十一月れはし先都る魚

權中教正久保季茲

祭典畧解の首に記す

凡祭典の儀式を學ばんには延喜式、儀式、内裏式、延曆の儀式  
帳、大神宮年中行事、令義解、集解、三代格、公事根源、西宮記、北山  
抄、江家次第、おと云愛たきふみハ數々あまど此を皆官社大  
社ハ幣物祭料のとを始め祭祀の季節祭官の進退等のとを  
主として記載せらまじ書にしあれば祭祀の濫觴行事ハ古  
實幣帛其他諸祭典の用法の如きハ泄ヒたると多し此等のと  
を學ばんハ古事記、日本紀、古語拾遺を始め國史雜史の類  
又近來の諸大家の考證論說等に據て參考せざれハ詳に  
ると能ハず如斯數類數卷の書籍に涉りて學ばんと初學の  
徒ハ難きわざなるを以て此學に志あるも就オと能ハず依  
て余初學幼童の爲に祭式學の楷梯とありなんをの識さば



やと獨ふぬりの朋友に語れるを早くも聞けたへたる人々より其書おれりやいふにくと問おこさるゝを以て此に其書をふせがん爲に彼是の式典國史雜史の中より諸祭祀に必用なりと思はるゝくたりを抄録して三卷を著し之を祭典略解と名附く此書素より幼童の爲に見安あらんとを主とし且簡易を旨とするを爲に意の如く盡さゝると多し見ん人達よ幸に是を諒し給へかし

勾魂舎主人識

祭典略解上之卷目録

恒例祭之部

諸神祭通式

- 元始祭之事 並祝詞文例
- 祈年祭之事 並祝詞文例
- 風神祭之事 並祝詞文例
- 大祓式之事 並祝詞文例
- 道饗祭之事 並祝詞文例
- 鎮火祭之事 並祝詞文例
- 鎮魂祭之事 並祝詞文例
- 新嘗祭之事 並祝詞文例
- 神嘗祭之事 並祝詞文例



同下之卷目錄

臨時祭之部

地鎮祭之事並祝詞文例  
新殿祭之事並祝詞文例  
假殿遷座之事並祝詞文例  
本殿遷座之事並祝詞文例  
門神祭之事並祝詞文例  
宅神祭之事並祝詞文例  
竈神祭之事並祝詞文例  
井神祭之事並祝詞文例  
除蝗祭之事並祝詞文例  
祈雨祭之事並祝詞文例

止雨祭之事並祝詞文例  
霹靂祭之事並祝詞文例  
地震祭之事並祝詞文例  
疫神祭之事並祝詞文例  
山神祭之事並祝詞文例  
出船祭之事並祝詞文例  
魚獵祭之事並祝詞文例  
醫神祭之事並祝詞文例  
祖靈祭之事並祝詞文例  
諸業祖神祭之事並祝詞文例

別記目錄

潔齋之事



神籬太玉串賢木之事

幣帛青和妙白和妙之事

大麻切奴佐之事

注進繩木綿垂之事

幡並比禮銖之事

高案並置座之事

黑貴白貴之事

神饌調進心得之事

再拜拍手之事

塩湯行事

散米行事

神於呂志神阿計之事

和琴並鴉尾琴之事

警蹕並稱唯之事

祝詞並祭文之事

玉串行事作法之事

直會之事

御靈代之事

御幌御壁代之事

神輿御船代之事

絹笠並刺羽之事

筵道敷設之事

人垣衣垣之事

弓矢楯矛之事



神樂之俳優之事

忌火燈燎之事

祈禱咒詛之事

太占龜卜之事

以上

祭典畧解上之卷

高杜神社祠官 勝山健雄謹撰

權中教正 久保季茲校閱

恒例祭之部

諸神祭通式

本日早且神殿を裝飾し幣帛并神饌の調度百事に注意すべし

但し祭祀に仕奉る神官は更なり祭儀に關する諸人を招集し庭上便宜の所は祓戸を設て身禊式を行ふべし

身禊式

先祓所に神籬を起樹し祓物と頒布すべし

次御鹽湯行事

次祓主降神行事

阿波利也遊波須止萬宇佐奴阿佐久良爾祓戸四柱乃大神

等於利居萬志萬世々々々々々々



次神酒神饌を供進す  
次被主奴佐探て神前に進み禊詞を申す

禊詞

掛卷毛畏伎神伊佐奈岐大神筑紫乃日向乃橘乃小門乃阿  
波岐原爾御禊被給比志時爾生坐留被戸四柱乃大神等今  
日乃御祭爾仕奉禮留神官乎始氏參集倍留諸人等我身爾  
過犯世留罪穢乃有牟乎婆被給比清給倍止白須事乎所聞  
食止畏美畏美毛白須

次被主座を立て祭官並群參の諸人を拂ふ

次齋主以下順次に被物を出せ

次被主昇神行事 但し其詞降神行事に同じ尤於利居萬世を加倍利萬世と申す

次神酒神饌を撤し被物を除く

次退手兩段して退出せ

祭式

先御膳殿に參着し幣物並神酒神饌を點檢せ

次齋主以下神殿に進み再拜拍手兩段

次散米行事

次齋主神前に進み御扉を開く 警蹕三聲 祓皆平伏

但し新年祭風神祭等の如き他神を招請奉る祭記より降神行事をなすべし其詞等ハ禊式に記すが如し

次神酒神饌を傳供せ 此間奏樂

- 神酒 二瓶 神饌 一壺 御魚 小大 御鏡餅 一飾 海草野菜 一臺
- 和稻荒稻 各一臺 以上

次齋主神前に進み慎て祝詞を奏し畢て再拜拍手兩段

次玉串行事



次神酒神饌と傳撒を 此間奏樂

次齋主昇殿し御扉を閉

次拍手兩段して各退出

次直會

元始祭 一月三日

元始祭ハ宮中神殿坐八前の大神達を始天神地祇八百萬大神及御歷代の皇靈を歳首に御親祭在せられ天津日嗣は本始を祝ひ給ふ御義なり故に元始祭と云ふ因て各神社に於ても本日祭祀を執行ひ天津日嗣の大御位の御榮を祈べし此祭典と元始としを云ると三元三始の義にあらず造化之元首群品之始祖とます皇祖天神の元始は靈徳に報賽し奉る祭祀なるを以てなり皇祖天神は御靈徳のと古事

記の序は乾坤初分參神作造化之首陰陽斯開二靈爲群品之祖云々故太素杳冥因本教而識孕土産島之時元始綿邈賴先聖察生神立人之世とあるを以て知べし又本祭ハ歳首の大禮として最尊重すべき祭日なれば獻らん幣帛ハ黒酒白酒を始鏡饊腹赤魚年魚柑子柿栗など獻るぞよかりなん黒酒白酒のとい鏡饊はと藻鹽草に千世までもか別記にいふべしけをならべてあひみんといえふ鏡のもちぬたらめや一本たをさ又堀川次郎百首元日の哥は今日よりハわれをもちぬのまするゝみうれしきかけをうつしてぞみんとあり又腹赤のと公事根源は景行天皇は御宇筑紫の國宇土の郡長濱よて海人は是を釣て奉る其後聖武天皇の御時天平十五年正月十四日大宰府より是を奉る是よりして年



毎の節會は供せべきよし定置きたるなり云々と見え又  
官曹事類は腹赤魚筑紫肥後二國所出天平十五年正月四日始供と見  
え又年中行事秘抄は宮内省奏腹赤費魚長九尺九寸太宰  
府の解文載寸法とみえ又年魚のと公事根源は吉野の國  
樺人云々常は參て年魚をうけ物を獻けるとかやとあり  
又大神宮年中行事は明年正月元日御饌料年魚云々と見  
ゆ又柑子柿栗のと同書は柑子百橋同前也柿一把栗五十  
計とある以て歳の始は必獻るべき幣物なるを悟る  
べし因云年の始に庶人の家にても柑子栗柿榎海鰻五  
菜と名附て來客に饗するを愛たき  
例とをるを古事あるとなるべし

祝詞

掛卷毛畏伎官中爾座大御神八前乃大神等乎始奉里天津

神八百萬國津神八百萬乃大神等御歷代乃御皇靈達乃大  
御前乎慎美敬比遙爾拜美奉氏恐美恐美毛白久  
新年乃新月乃三日乃日乎生日乃足日止齋定氏大神等乃  
大御前爾新伎年乃始乃御祭仕奉止志氏獻留宇豆乃幣  
帛波今日乃朝日乃豐榮登爾御井乃若水汲取氏齋炊爾炊  
多留豐御食爾天津日乃御像乎宇都志造禮留餅飯鏡御酒  
波囊閉高知囊腹滿雙氏釀造成多留一夜酒爾清酒緒乃廣  
物止斯良奴比筑紫乃海人我貢奉志腹赤乃御贄爾倣比氏  
鱒乃魚爾美好乃々吉野乃國樺人等我貢奉志例爾倣比氏  
年魚乎取添大野原爾生留物止甘菜辛菜青海原乃物止廣  
女若女時自久乃加具乃木實止柑子柿栗爾至麻氏八取乃  
机代止置高奈志氏獻留此乃幣帛乎安幣帛乃足幣帛止平



久安久所聞食氏畏加禮舒毛皇御孫命乃大御壽乎手長乃  
 大御壽止堅盤爾常磐爾守給比幸閉給比阿禮坐皇子等親  
 王等乎毛長平久護幸閉給比又天下乃百姓等我身爾至麻  
 氏爾守惠幸閉給倍止畏美畏美毛白須  
 言別氏此乃所乃底津磐根爾宮柱太敷立氏齋奉氏鎮祭留  
 掛卷毛畏伎宇夫須那大神乃宇豆乃御前爾稱言竟奉久  
 大神達爾今日乃御饗止獻留御酒御饌乎諸共爾平久所聞  
 食氏敷坐留此鄉乃里人等我取作牟五穀乎始氏草乃片葉  
 爾至麻氏惡風荒水爾相志米給波受秋乃垂穗乃八束穗爾  
 成幸閉給倍又漏落牟事乃將在手婆神直日爾見直志大直  
 毘爾聞直坐氏根國底國余里荒備疎備來牟天乃禍津毘止  
 云神乃爲牟枉事爾相率里相口會志米給布事無久下行波

下守上行波上守夜乃護日乃護爾護給比矜給閉止十六自

物膝拆伏宇事物頸根突拔氏稱言竟奉久止白須

言別氏云々以下の詞ハ祈年風神祭の如き招祭の時ハ必白すべき也

祈年祭 二月四日

祈年祭ハ大神宮以下大小神祇ニ與津御年の豊稔ならんと  
 を祈奉る祭祀なれど殊更ニ御歳大神ニハ白猪白馬白鷄等  
 の幣物を獻り又高御魂大宮女水分の社ニハ神馬を獻りて  
 年穀の豊穰を祈求る祭祀なると以て祈年祭トハ云ふなり  
 此祭典のト令義解祈年祭の條ニ謂祈猶禱也欲令歲災不  
 作時令順度即於神祇官祭之故曰祈年トあり又公事根源  
 ニ祈年ハ豊年を求などあるを以て五穀の豊稔を祈る祭  
 祀なると明けし又祭神のト延喜式ニ祈年祭神三千一百



三十二座大四百九十二座三百八十八座案上官幣一小二千六  
百四十座四百三十三座案下官幣云々とあるもて詳なり  
されと猶幼童の爲ふ云ん三千一百三十二座の大小神祇  
皆祈年祭幣に預り給ふ義ふへあれどそが中み等差あり  
所謂官幣大社四百九十二座の内宮中の卅座京中の三座  
畿内の二百卅一座伊勢の大神宮荒祭宮瀧原宮伊佐奈岐  
宮月讀宮度會宮高宮等の十四神伊豆の三島武藏の氷川  
安房の安房坐神下總の香取常陸の鹿島近江の川田御上  
水尾の五座若狹の宇波西丹後の籠播磨の海三座安藝の  
速谷紀伊の丹都比女日前國懸伊太祁曾大屋都比賣都麻  
都比賣鳴神須佐等の八座阿波の忌部石門別入倉比賣の  
二座等の三百四座へ神祇官の案上幣帛に預り給ひ尤伊勢の

十四座は幣帛を別案に備置使を差して奉獻せら同小社  
れ三島以下の廿六座へ祝部を招て班幣せらる也  
二千六百四十座の内宮中の六座畿内は四百廿七座等へ  
神祇官案下の幣帛に預り給ふ由也此又宮中の神を除く  
る其他の大一百八十八座小二千二百七座の神達へ其國  
々の國府に於て國長以下會同し幣帛へ正税を用お祭式  
へ神祇官の儀式に倣ひて齋祭られし由なりそへ同書に  
神祇官祭神七百三十七座奠幣案上神三百四座社一百九  
十八所前一百六座云々不奠幣案上祈年神四百三十三座  
社三百七十五所前五十八座云々右神祇官所祭云々因云  
は本居翁の説の如く二座以上を祀れる神社の中主たる  
神一座を除きて其餘を前と云ふ社何所前何  
座と區別して記載せられし故の社の本主たる又國司祭  
神達の幣物多く前神達は幣物の減れるが故也  
祈年神二千三百九十五座云々右國司長官以下准例散齋



三日致齋一日共會祭之其幣皆用正稅とあるもて詳なり  
 又幣帛のとを記されし條に大神宮度會宮各加馬一疋御  
 歲社加白馬白猪白鷄各一高御魂神大宮女神及耳無飛鳥  
 石村忍坂長谷吉野宇陀葛木竹谿等水分十九社各加馬一  
 疋と記載せられしを思ふに主として此等の神社に祈  
 り給ふ義なると明けし依て按るに普通神社に於て祈年  
 祭を執行はん時に伊勢の大御神御歲大神を齋祭るぞ  
 よかるべき又本祭をへ登志其比乃万都里と唱ふべし年  
 とハ五穀を云り祈年と書ふハ漢字を借るなり詩經太雅  
 年孔鳳方社不莫昊天上帝則不我虞敬恭神明宜无悔怒注  
 祈年孟春祈穀于上帝孟冬祈來于年天宗是也また周禮  
 祈年承豐祈年祭濫觴れと公事根源に天武天皇四年二  
 月に始て此祭ありと記されしかとはいはるゝあらん此

より先崇神天皇の御代ハ天神地祇を御崇敬在せられし  
 故ハ天地の神うづなひまして風雨時に隨ひ萬の種つ物  
 よく登たるよし古記ハ詳なればなり又此祭典ハ白猪白  
 馬白鷄等を獻れる證ハ儀式に二月四日祈年祭儀云々其  
 日卯四刻所司辨備庶事神祇官陳幣帛於齋院京職貢白鷄  
 一隻近江國豚一豚云々又西宮抄に御巫座西廳前率御馬  
 十一疋繫猪鷄などあるもて詳あり又古語拾遺に昔在神  
 代大地主神營田之日以牛突食田人于時御歲神之子至於  
 其田唾饗而還以狀告父御歲神發怒以蝗放其田苗葉忽枯  
 損似篠竹於是大地主神令片巫肱巫占求其由御歲神爲祟  
 宜獻白猪白馬白鷄以解其怒依教奉謝云々仍從其教苗葉  
 復茂年穀豐稔是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歲神之緣



也とあり如此重き故實なる幣物なれば各神社に於くも  
祈年祭執行ふ時は形代を作りてなりとも獻るべし因云  
啓蒙に不能引進神馬者畫之獻とあれハ又三代格に右檢  
昔より形代を作りて神獻せる例あり  
案内二月祈年六月十二月々次新嘗等者國家之大事也と  
あり如此重き神事なれば各神社に於ても力の及ばん限  
り幣帛を獻り精一の誠を盡し年穀の豊穰ならんとを祈  
念致すべし

祝詞

掛卷毛畏伎天照大御神豐受大御神大年御年若年大神等  
殊爾波此所乎字斯波岐坐留産土大神乃御前爾白久  
天照日乃大神乃御照坐天乃足日乃何日波在杵毛天皇我  
朝廷爾宜掟給比志御法乃隨爾御田作留時二月四日乃日

乃朝日乃豊坂登爾獻留幣帛波白猪白馬白鶏乃圖料乎始  
氏由紀乃御食御酒波饗閉高知饗服滿雙氏大野原爾生物  
波甘菜辛菜青海原爾住物波鱒乃廣物鱒乃狹物與都海菜  
邊都海菜和稻荒稻爾至麻氏爾横山乃如久置高成氏奉留  
幣帛乎安幣帛乃足幣帛止平久安久所聞食氏天下乃百姓  
等我手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氏取作牟與津御年乎  
始氏粟田豆田麥稗爾至麻氏爾霖雨乃爲爾損奈布事無久  
惡風虫喰乃災害無久秋乃垂穗乃伊加志穗爾成幸閉給波  
婆初穗乎婆千穎八百穎爾打積置氏新嘗乃御祭美麗久仕  
奉牟止誓言立氏大神達乃御前爾稱言竟奉久止白須

風神祭 四月四日 七月

風神祭を暴風惡水の災害なくして五穀の豊饒ならんとを



大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加乃賣神平群郡龍田坐天御柱命國御柱命また伊勢國風日祈宮坐伊勢津彦神等に祈奉る祭祀なるを以て風神祭と云ふなり

此祭典のと神祇令に孟夏風神祭孟秋風神祭とありて同義解に謂亦廣瀨龍田二祭也欲令又風不吹稼穡滋登故有此祭と見えまた大忌祭の解に謂廣瀨龍田二祭也欲山谷水變成甘水浸潤苗稼其全稔故有此祭とあり又弘仁式に大忌祭一座廣瀨社七風神祭二座龍田社七又大忌風神二社者四月四日祭之とあるもて詳なり又祭神のとハ神名式に大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加乃賣神社大和國平群郡龍田坐天御柱命國御柱命とあり又此神の風を掌り給ふとハ日本紀に伊弉諾尊與伊弉冊尊共生大八洲國然後

伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化為神號曰級長戶邊命亦曰級長津彦命是風神也とあり又伊勢津彦神の風を掌り給ふ由ハ伊勢風土記に天日別命奉勅東入數百里其邑有神名伊勢津彦天日別命問曰汝國獻於天孫哉答曰吾覓此國居住日久不敢聞命矣天日別命發兵欲戮其神于時畏伏啓曰吾國悉獻天孫吾不敢居矣天日別命問曰汝之去時何以爲驗啓云以今夜起八風吹海水乘浪將東入此則吾之却由也天日別命止兵窺之比及中夜風四起扇舉波瀾光耀如日陸海共朗遂乘波而東去とあり又太神宮年中行事に風日祈宮祭禮號御笠云々笠縫内人御蓑笠神三本附捧持云々又其祝詞に今年四月十四日今時於以天宮司乃常毛奉留風日祈乃幣帛並御笠蓑於日



祈、内人姓名爾令捧持奉狀於云々と見えたるにて曉るべし因云伊勢津彦命と稱し奉るの即信乃國諏方社と鎮座し健御名方富命の別名ならんと古事記傳に見へたり又此祭典ハ崇神天皇の大御世に權祭の祝詞に詳なり扱上條に云るが如く風神の祭ハしも天下萬民の一日片時も無て叶えぬ食物の素たる五穀の豐熟を祈り風雨の災害なからんとを禱る祭典なれば各神社に於ても行ふべき祭祀なり各社と於て執行の時ハ廣瀬龍田の大神達ハ更なり伊勢津彦神産土大神を併祭るぞよかりなん又此祭典に獻らん幣帛ハ龍田祭の祝詞に見えたるが如く明妙照妙和妙荒妙五色の物を始め麻笥櫛栳等の形代なりとも獻るべし又風日祈宮の祝詞に見えたる御笠蓑また薙鎌などを進るぞよろしかるべき

祝詞

空見津大和國平群郡龍田乃宮爾鎮座坐須掛卷毛畏支天  
 御柱命國御柱命亦名波志那都比古志那都比賣大神及廣  
 瀨乃川合爾稱言竟奉留若宇加乃賣大神殊爾波神風乃伊  
 勢國風日祈乃宮爾鎮座坐須伊勢津彦大神乃御前爾白久  
 現津御神止大八島國所知食志御間城入彦天皇乃大御世  
 爾天下乃公民乃取作五穀物乎始氏草乃片葉爾至麻氏不  
 成傷給我故爾天皇詔給波久神等乎婆天津社國津社止念  
 事無久遺事無久稱辭竟奉止思須乎誰神會天下乃公民乃  
 作々物乎不成傷神等波我御心會止悟奉禮止宇氣比賜氏  
 御寐坐留夜乃大御夢爾悟給比志神言乃隨爾比古神爾波  
 明妙照妙和妙荒妙五色物楯戈御馬乃形代乎獻里比賣神



爾波麻笥櫛栳爾五色物乃形代乎獻里又伊勢津彦大神爾  
波風日祈乃宮司乃常爾獻留例爾倣比乎御笠蓑爾風薙乃  
御鎌乎添氏獻里又若宇加乃賣大神乃御前爾至迄爾獻留  
幣帛波御酒御食乎始氏大野原爾生留物波甘菜辛菜青海  
原爾住物波鱸乃廣物鱸乃狹物與津藻菜邊津藻菜御母比  
堅鹽爾至麻氏爾如横山打積置氏奉留幣帛乎安幣帛乃足  
幣帛止大神等乃御心毛平久所聞食氏公民乃作止作留物  
波五穀乎始氏草片葉爾至麻氏惡風荒水爾不令相給與津  
御年乎八束穗乃茂穗爾成幸閉給閉止十六自物膝折伏宇  
事物頸根突拔氏稱言竟奉久止白須

大祓 六月三十日 十二月 准之

大祓とて百官を集へて各其過犯せる種々の罪穢を祓潔む

る儀式なるを以て大祓と云又在昔も國之大祓とて天下諸  
國に令して天罪國罪種々の罪惡を犯せる罪犯者を求て祓  
物を科せ輪しめて解除せらまじもあり又神事潔齋の時に  
不淨を解除するもあり皆大祓とは云ふなり

大祓のと天武天皇紀に五年八月辛亥詔曰四方爲解除用  
物則國別國造輪祓柱馬一匹布一常以外郡司各刀一口鹿  
皮一張鑷一口刀子一口鎌一口矢一具稻一束且每戸麻一  
條とあり又十年七月六日の條に令天下悉大解除など見  
え又元正天皇養老五年秋七月己酉始令文武百官率妻女  
姊妹會於六月十二月晦大祓之處とありて其式ハ太政官  
式に六月十二月晦日於宮城南路大祓大臣以下五位以上  
就朱雀門辨史各一人率中務式部兵部等省中見參人數百



官男女悉合祓之臨時大祓亦同とあり又神祇令に凡六月  
 十二月晦日大祓謂祓者解也者中臣上御祓麻ヤマトカサ東西文部謂東  
 直西漢上祓刀讀祓詞謂文部漢音訖百官男女聚集祓所中  
 文首也臣宣祓詞卜部爲解除とあるにて詳なり凡大祓の濫觴に  
 ハ二義ありて其一ハ上古神代に伊裝諾尊黃泉國ちふ穢  
 國に到給ひしとを悔給ひて筑紫日向の橘小門の阿波岐  
 原にて大御身を禊給えんと先御杖帶衣禪履に至まて悉  
 皆投捨給ひて身禊祓給ひし由記紀に詳なり此即身禊祓  
 の始なり又一ハ素盞鳴尊天罪とて畔離溝理樋放頻蒔串  
 刺生剝逆剝屎戸等の惡き御爲行ありしを以て八百萬神  
 等千座置戸の解除を科せ手足の爪を抜しめて其罪を贖  
 えしめ逐給ひしとあり此即大祓の時又祓物とて種々の

料物を出さしめ其罪を贖えしむる緣なり此二義を合せ  
 て身禊大祓の式となしたる者ぞかし因云伊邪那岐大御  
 神御徳を依て三柱の貴御子を生給ひしと又須佐能男大  
 神と贖物を出し御身を逐はれ給ひし後最清き御心の  
 神となりまして世又大祓の神事の尊きとを悟るべし又如此尊  
 ちと思合せて大祓の神事の尊きとを悟るべし又如此尊  
 き由緒ある神事なるを以て人の代となりて神日本磐  
 余彦天皇都を檀原に定給ふ御時に天兒屋命の孫天種子  
 命をして天罪國罪を解除せしめ給ひしより御歴代天皇  
 傳給ひて六月十二月晦日に定期として行給ふも更なり  
 天下に非常の異變ある時に諸國よ令して臨時ふ國之  
 大祓ちふと行なえれしなりそハ古事記の仲哀天皇の條  
 に天皇既崩訖爾驚懼而坐殯宮更取國之大奴佐而種々求  
 生剝逆剝阿離溝埋屎戸上通婚下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚



之罪、類爲國之大祓而云々とあるもて詳なり此即臨時大祓の物に見へたる始なりまた贖物のとて延喜式に御贖鐵人像二枚金裝横刀二口五色薄絹各一丈一尺絲三兩安藝木綿二斤凡木綿一斤麻二斤庸布二段御衣二領袴二腰被二條云々又神祇令に凡諸國須大祓者每郡出刀一口皮一張鍬一口及雜物等戸別麻一條其國造出馬一疋云々とあり又大祓上祓中祓下祓の四種ありろと三代格延曆廿年五月十四日の大政官符に足准犯科祓例事大祓料物廿八種云々右闕怠大嘗祭及同齋月内吊喪問病判署刑赦文書決罰食宍預穢惡之事者宜科大祓所輸雜物具如前件官人有犯兼解見任また上祓料物廿六種云々右闕怠新嘗祭鎮魂祭神嘗祭祈年祭月次祭神衣祭等事毘伊勢大神宮禰

宜内人及穢御膳物並新嘗等諸祭齋日犯吊喪問病等六色、禁忌者宜科上、祓輸物如右また中、祓料物廿二種云々右闕怠大忌祭風神祭鎮花祭三枝祭鎮火祭相嘗祭道饗祭平野祭園韓神春日等祭事、毘物忌戸座御火炬紆物忌女及觸穢惡事預御膳所並忌火等祭齋日毘祝禰宜及預祭事神戶人犯吊喪問疾等六色、禁忌者宜科中、祓輸物如右また下、祓料物廿二種云々右闕怠諸祭祀事及齋日毘祝禰宜並預祭神戶人犯諸禁忌者宜科下、祓輸物如右とあるもて知べし扱前條に畧記せるが如く大祓ちふ神事としも上古神代に權興して神日本磐余彥天皇の大御世より夏冬の二季にそ必行せらるゝ禮典也となれるなり如此尊き神事なれば各神社に於ても二季の大祓を更なり神祭の時に入怠



るべからず扱其儀式並料物等のと近く式部寮撰定の法  
度もあれば記さず前條に記載せるが如く昔の百官男女  
行れし由なれど方今諸官省の長次官をのみ賢所の前  
延よ召し賸物は白根源大祀は百官一同あつたりせら  
るをよし又云公事根源大祀は百官一同あつたりせら  
とを武塔の茅輪の家々輪出さると有云々とありて  
避るはならんと思わる事よ道饗祭の條よ云べし  
祝詞

此乃所乎伊豆乃磐坂止掃清氏神籬立氏招奉令坐奉留瀬  
織津比咩神速開都比咩神氣吹戸主神速佐須良比咩神天  
津神國津神八百萬神等乃御前爾白久  
遠津神代爾伊邪那岐大神乃詔給久吾波伊那志許米志許  
米岐穢國爾至氏在介里故吾波大身乃祓世奈止詔給比氏  
筑紫乃日向乃橘乃小戸乃阿波岐原爾至坐氏禊祓給比支

又速須佐之男命爾千位置戸乃祓物乎科世亦鬚乎切手足  
乃爪乎毛令拔氏神夜良比夜良比給比支故此古事爾依氏  
往古余里毎年爾仕奉來志例乃隨爾惡解除善解除乃祓物  
乎科氏禊祓仕奉止獻留御酒御食御母比堅鹽乎安幣帛  
乃足幣帛止平久安久所聞食氏此乃祓所爾參集閉留神官  
乎始氏刀禰男女等我身爾至麻氏禰犯世留雜々乃罪穢在  
牟乎波今日乃大祓爾祓給比清給閉止申須事乃由乎瀬織  
津比咩神速秋都比咩神氣吹戸主神速佐須良比咩神八百  
萬大神等共爾天乃班駒乃耳彌高爾所聞食止畏々毛白須  
道饗祭 六月三十日 十二月 准之月  
道饗祭ハ鬼魅の外より來れるを敢て其地に入さらしめん  
と預め幣帛を地方の四角十境の路上に供て塞神を齋祭れ



る祭典なるを以て道饗祭といふなり

此祭典のと神祇令に季夏道饗祭季冬道饗祭とありて同義解に謂卜部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎道而饗也と見えたり又續日本紀光仁天皇の卷に寶龜元年六月云々祭疫神於京師四隅畿内十塚乙卯京師飢疫賑給之同九年三月の條に畿内諸塚祭疫神又聖武天皇紀天平七年八月の條に大宰府疫死者多思欲救療疫氣以濟民命是以奉幣彼部神祇爲民禱祈焉云々長門以還諸國守若介專齋成道饗祭祀とあり又小右記に長和四年四月廿七日來月一日四角四塚祭事依光榮朝臣上奏所被行也云々五月六日今夜吉平奉仕四角祭枇杷殿四角者云々九日今日公家被行四塚祭などあるも

皆道饗祭に同じ依て思ふに道饗祭は大裏の四角四塚に  
限らず諸國に於て疫疾流行の時之を行ふは云迄を  
なく一家に疫氣ある時は其家の四角四塚に於てを疫氣  
を避る爲に行ふ祭典あるとを悟べし又公事根源の大祓  
條に家々に輪をこゆると有と記さまじし武塔神の茅輪  
の古事か出たるとにて疫神をさくる心ばへか世に志き  
たる事疑なかるべし即道饗祭祀を大祓の式畢て後に行  
える、祭祀なればなり茅輪の疫氣を避るとい備後風土  
記に疫隅國社昔北海坐志武塔神南海神女子乎與波比爾  
出坐爾日暮多利彼所仁將來二人在伎兄蘇民將來止云甚  
貧窮弟巨且將來止云富饒屋舎一百在伎爰爾武塔神借宿  
處仁惜天不借兄蘇民將來借奉留即以粟柄爲座以粟飯等



饗奉流饗奉既畢武塔神出坐後爾經年率八柱子還來天詔  
 久我將奉之爲報荅汝子孫在哉問給蘇民將來荅申久已女  
 子與斯婦侍止申即詔久以茅輪令着於腰上隨詔令着即夜  
 爾蘇民與女人二人乎置天皆悉久許呂志保呂保志天伎即  
 詔久吾者速須佐雄能神也疫氣在者汝蘇民將來之子孫止  
 云天以茅輪著腰上隨詔令著即家在入者將免止詔伎とあ  
 り因云此文に依る須佐能雄神の御心とあて疫氣を流行  
 りせしめ給ひし如く聞ゆれどにあらは疫氣を避る  
 法をしめ蘇民に教ひ諭し給ひし者ぞかそは日本紀纂  
 疏に進雄尊借宿諸神皆不許之時有蘇民將來云々命蘇民  
 出迎而甚勞之餽以脫粟飯進雄神大喜欲報之其夕命蘇民  
 渾家帶茅輪即有大疫除蘇民家皆遭殃云々とあるを以  
 て悟る又本祭の祭料幣帛のと廷喜式に五色薄絹倭文木  
 綿麻庸布牛皮猪皮鹿皮熊皮酒稻艘堅腊海藻鹽等の數種  
 を載られたり然ども此の朝廷の御式なれば各神社にて

行ふ時ハ酒稻以下品この例に倣ふべし扱道饗祭のと前  
 條に記載せるが如なれハ季夏季冬の定時ハ更也疫疾流  
 行る時にハ必各村落に於ても行ふぞよあるべき

祝詞

此乃八衢爾湯津磐村乃如久塞坐氏四方四隅與里荒備疎  
 備來其牟枉物乎障留給布八衢比古八衢比賣久那斗乃大  
 神達乃御前爾畏美畏美毛白久  
 遠津神代爾神伊那那岐命根之堅洲國爾到給比豆彼國乃  
 穢忌々志美立歸坐留時爾八色乃雷公豫母都醜女等追敷  
 志乎大神達波黃泉津比良坂乃坂路爾湯津磐材乃如久塞  
 坐氏根國底國與里荒備疎備來禮留物乎障留給比志御因  
 緣爾依氏今日志毛御前爾御祭仕奉留幣帛乎平久所聞食



給比氏此乃里回乃四方四隅與里荒備疎備來牟枉物共爾  
相率相口會志米給事無久下行波下乎守里上行波上手守  
里夜守日護爾護幸附給倍止天津祝詞乃太諄辭事乎以氏  
稱言竟奉久止白須

鎮火祭 六月三十日 十二月 准之

鎮火祭ハ火災を防ク爲ニ火を鑽改めて火魂大神また水神  
土神を齋奉る祭典なるを以て鎮火祭ト云ふなり

此祭典のと神祇令に季夏鎮火祭季冬鎮火祭とありて同  
義解に謂在京城四方外角卜部等鑽火而祭之爲防火災故  
曰鎮火とあるを以て火災を防爲の神事なると詳な  
り諸祭典に火を鑽改むるは例なれど此祭典ハ殊更に火  
忌のわる故を火結大神としも御心あふく志き大神に

坐々不淨をいたく忌給ふ御心ハ時々して荒び健び給  
ふ故に皇御祖伊邪那美大神の御言にも吾汝妖命の知し  
食上津國に心惡子生置て來ぬを宣給むて其御荒びを鎮  
まつらん爲にとて水神土神また匏川菜等を生なし給む  
て此心惡子の心荒びを水神匏土神川菜を持て鎮奉と  
事教悟し給むし由延喜式の祝詞式に詳なり扱又鑽火や  
云るハ檜など以て作りたる燧白燧杵もて輾磨出せる火  
なり世俗の切火と稱するハ石と鋼を以打出せる火な  
りハハ打火と云ものにして鑽火にはあらず鑽火の別記  
云ふハ火災ちふ者はいとく畏きものなれば二季の大  
祓を執行せし後に各地方に於ても必ず行ふよかりな  
ん



祝詞

此乃砂庭爾神籬立氏招奉里令坐奉留懸卷毛畏伎火産靈  
 大神及彌都波能賣神埴山姬大神等乃御前爾稱言竟奉久  
 高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以氏皇御孫命波  
 豐葦原乃水穗國乎安國止平久所知食止天下所寄奉給比  
 志時爾事寄奉志々天都詞太詞事乎以氏申久神伊佐奈伎  
 伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氏國乃八十國島乃八十島  
 乎生給比八百萬神等乎生給氏麻奈弟子爾火結神生給氏  
 美保止被燒氏石隱坐氏夜七夜晝七日吾乎奈見給比曾吾  
 奈伎乃命止申給支此七日爾波不足氏隱坐事奇止氏見所  
 行須時火生給氏御保止乎所燒坐支如是時爾吾名妹命乃  
 吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多志給比津止申給氏吾

名妹乃命波上津國乎所知食倍志吾波下津國乎所知牟止  
 申氏石隱給氏與美津枚坂爾至坐氏所思食久吾名妹命乃  
 所知食上津國爾心惡子乎生置氏來奴止宜氏返坐氏更生  
 子水神菟川菜埴山姬四種物乎生給氏水神菟埴山姬川菜  
 乎持氏鎮奉禮止事教悟給支故此御因緣爾依氏三柱乃大  
 神達乃御前爾御祭仕奉止獻留御酒御食種々乃幣帛乎安  
 幣帛乃足幣帛止平久所聞食氏火給大神乃御心稜威疾備  
 荒備給波牟爾波水神菟土神川菜乎持氏鎮給閉止鹿自物  
 膝折伏鵜事物頸根突拔氏畏美畏美毛白須

鎮魂祭 十一月廿二日 古の十一月の中寅日たり御  
 改暦以後本日又定らる

鎮魂祭ハ仲冬寅日に皇上並后宮の御魂を鎮奉り己日に東  
 宮の御魂を齋鎮むるハ更なり庶人の身の上にも非常のと



ある時ハ招魂すべき祭祀なるを以テ鎮魂祭トハ云ふなり  
此祭典のと神祇令に仲冬寅日鎮魂祭とありテ義解に謂  
鎮安也人陽氣曰魂魂運也言招離遊之運魂鎮身體之中府  
故曰鎮魂也見えたり又延喜式に中寅日晡時中宮鎮魂同  
日祭之己日晡時供東宮鎮魂とあり又北山抄に中寅日鎮  
魂祭神若有二寅下寅行之有例云々とあり又祭神のトハ  
同書に鎮魂祭神八座魂大宮女御膳津神辭代主大直神一  
座とあり又其祭式のトハ儀式に鎮魂祭儀十一月中寅日  
東宮用其日所司預敷神座於宮内省廳事云々酉二點大臣  
以下就西舍座神祇伯以下率琴師御巫神部卜部等着榛摺  
衣令持供神物左右相分入立庭中神部升自東階置神寶於  
堂上云々神祇伯喚琴師名二人共稱唯次喚笛工名二人共

稱唯伯命琴笛相和云々神部一人候拍子御巫始舞每舞巫  
部譽舞三廻奈多街大藏錄以安藝木綿二枚實於篋中進置  
伯前御巫覆宇氣槽立其上以梓撞槽每十度畢伯結木綿鬘  
云々と見えたりこは天鈿女命の俳優より出たるにて  
既に古語拾遺に凡鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡然則御巫  
之職應任舊氏而云々とあり又令天鈿女命以眞辟葛爲鬘  
以蘿葛爲手繼以竹葉飯稻木葉爲手草手持着鐸之矛而於  
石窟戸前覆誓槽舉庭燎巧作俳優相與歌舞云々とあり此  
其由縁なり依て天鈿女命の裔たる御巫猿女君ら宇氣槽  
の上に立て梓もて其槽を撞とゞろかし比登布多美余伊  
都牟由那々夜許々能多理と天の數歌を唱へ十種神寶の  
數に合はる事を代々職れるなり又本祭の濫觴は令集解



に饒速日命降自天時天神授瑞寶十種息津鏡一、邊津鏡一、  
 八握釵一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比  
 禮一、品々物比禮一、教導若有痛所者合茲十寶、一、二、三、四、五、  
 六、七、八、九、十、云而布瑠部由良由良止布瑠部如此爲之者死  
 人返生矣とあり此を鎮魂祭の縁なる如此尊き由緒ある  
 神事なるを以て神日本磐余彦天皇の大御代の始の年十  
 一月庚寅日に饒速日命の御子宇摩志麻治命に令て鎮魂  
 祭を行なはしめ給ひしを始として御代々々の天皇大嘗  
 祭の前日に行給ふ例とぞなりにける舊事本紀云磐余彦  
 尊元年十一月庚寅  
 宇摩志麻治命初齋瑞寶奉爲帝后鎮祭御魂所請齋祚其鎮魂之祭自此始矣とあり又御病の時に鎮  
 魂祭を行給ひし例を云ば天武天皇の白鳳十三年九月廿  
 四日の條に爲天皇體不豫云々やありて同を十一月廿四

日の條に是日爲天皇招魂之とあるにて詳なり前引る  
 令義解の  
 文は招離遊之運魂鎮身體之中府故曰鎮魂とあり扱前條  
 以て此に招魂之とあるの即鎮魂祭なると明けし  
 に引る天神の神勅に若有痛所者合茲十寶云々爲之者死  
 人返生矣と教導給ひし勅語を慎て按るに獨天皇の大御  
 身の上へのみ如此爲よと詔給ひし勅語にあらし此ハ  
 天下萬民の身上迄に係まる詔勅ならん然と神授の十種  
 の瑞寶ハ天皇の大御許に祕置給ふ御寶器にして二無御  
 寶なれば他所にて鎮魂祭を行むとするも事備はぬを  
 更なり瑞寶の眞形をだに知に由なし因云十種の神寶の  
 圖とて異形の文をし  
 るせる物あるを見たり此ハ中古の俗神道者流の疑作せ  
 る物よして探ふ足ざる物なれと詛て信用する人なしと  
 一言驚し置たり然と普通人民の身上まゝに係れる神勅  
 ならんにハ十種の瑞の寶はあらずとも前條畧記せる



儀式に做ひて八前の大神直日、大御達の御前に誓槽を覆  
置茅卷の矛を持て種々ろかじ一より十に至まで天の  
數歌唱あげて十種の瑞寶の數に合て木綿鬘を結留是を  
して玉緒をなし病者に授て頸に掛しめたらんには必天  
神地祇の御幸心を蒙奉ると疑なかるべし

祝詞

懸卷毛畏伎大宮中乃神殿爾座神魂高御魂生魂足魂魂留  
魂大宮能女御膳津神辭代主大直日神等乃御前爾畏美畏  
美毛白久  
高天原爾神留座神魯岐神魯美乃命持氏宇摩志麻治命乃  
御父饒速日命爾十種乃瑞寶瀛津鏡邊津鏡八握釵生玉足  
玉道反玉死反玉蛇比禮蜂比禮品々乃物比禮乎授給氏天

津日嗣止大八島國所知看皇御孫命乃大御身乎始氏豐葦  
原乃水穗國爾在與留現伎青人草等我身爾至麻氏阿都加  
比奈夜米流所有牟爾波此乃十種乃瑞寶乎合氏一二三四  
五六七八九十止云氏布流倍由良由良止布流倍加此奈志  
氏婆死禮留人毛生反里奈牟止言依志氏天降給比志御因  
緣爾依且志貴島乃大和國糧原乃大宮爾肇國所知看座志  
天皇乃大御代爾宇摩志麻治命爾令且大御魂乎齋鎮奉志  
米給比志御例乃麻爾邇爾御代々々乃天皇乃大御廷爾毛  
仕奉志米給比志御神事爾習比氏掛卷毛畏伎大宮中乃神  
殿爾座神魂高御魂生魂足魂魂留魂大宮能女御膳津神辭  
代主大直日乃大神達乃大前爾宇氣槽覆氏撞登騰呂加志  
天乃數哥宇多比阿計氏浮禮往麻久須留玉緒乎多志爾結



留氏魂結乃神事仕奉留狀乎宇麻良爾所聞看幸閉給閉止  
獻留幣帛乎平久安久所聞食座氏某我身爾阿都加閉奈夜  
阿倍病乎婆獻留嚴乃清酒伊登須美夜加爾伊夜志給比氏  
具我命乎婆堅酒乃堅磐爾常磐爾守幸給比氏玉緒波齋乃  
庭佐良受現身乃世乃長人止在志米給閉止乞祈奉留言乃  
由乎平久所聞食給比止猪自物膝折伏鵝事物頸根衝拔天  
乃八平手打上氏畏美畏美毛白須

新嘗祭 十一月廿三日 古の十一月の中卯日たり 御改曆後本日と定らる

新嘗祭ハ毎歳新稻を以て炊ふる忌火の御膳また黒酒白酒  
など天神地祇に奉り 天皇御自らも嘗給ふ祭義なるを以  
て新嘗祭と云又御代の始の新嘗をば大嘗祭也も云ふなり  
昔ハ大嘗新嘗とてゑだてもなま又新嘗ハ朝家比とならず

下々までもなべて爲とし也

此祭典のと神代紀に天照大神嘗新嘗時云々又神祇令に  
仲冬下卯大嘗祭また義解に謂若有三卯者以中卯爲祭日  
不更待下卯也また大嘗者毎世一年國司行事以外毎年所  
司行事と見え又天武天皇紀に五年十月丁酉奉幣帛於相  
嘗新嘗諸神祇云々又續紀の宣命に今日方新嘗乃猶良比  
乃豐乃明聞許之賣須日仁在云々また皇極天皇紀に丁卯  
天皇御新嘗是日皇太子大臣各自新嘗とあり又萬葉十四  
下總國哥に爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛云々  
などあるもて上世ハ大嘗新嘗とて差別もなく又家々に  
も新饗と爲しことぞ知べし 因云萬葉の哥のと古事記傳  
世とハ下總國に葛飾と云處あり其處比早稻を可立思加和  
倍須登毛とハ田舎に始て早稻を茹て物して里隣の者集



て食をバ爾倍すと云 又本祭々神のと延喜式に新嘗祭奠  
 幣案上神三百四座云々右中卯日於此官齋院官人行事と  
 あり又三代格寛平五年三月二日の太政官符に應殊加檢  
 寮敬祀四箇祭事とある條に右檢案内二月祈年六月十二  
 月月次十一月新嘗祭等者國家之大事也欲令歲突不起時  
 令順度預此祭神京畿外國大小通計五百五十八社云々と  
 あり抑本祭へ前條に記載せるが如く四箇祭として國家の  
 大事とをせらるゝ祭祀なきの天神地祇とすべて齋祭ら  
 せ罷るゝ儀式にはあれど三代にかく記載られし神社の  
 數へ別なる由緒ありて神祇官の祭幣に預り給ふ神社を  
 いへるなるべし又新嘗の支字正しくの爾比安閑と訓へ  
 し古事記傳に新嘗は新稻を以て饗するを云名あり云々  
 此記下卷朝倉宮段採り哥又大后の御歌に爾比那閉夜

とあるを正と云々那と通はえいふ例多ければ直に新嘗に  
 る有ぬべし又云々那と通はえいふ例多ければ直に新嘗に  
 年れしを新嘗と云々那と通はえいふ例多ければ直に新嘗に  
 置れしを新嘗と云々那と通はえいふ例多ければ直に新嘗に  
 めしを新嘗と云々那と通はえいふ例多ければ直に新嘗に  
 を大嘗と稱ひて給ふ事に重き儀と云々那と通はえいふ例多  
 新嘗と稱ひて給ふ事に重き儀と云々那と通はえいふ例多  
 文に行事とあるを以て知るべし又本祭濫觴のと公事根  
 源に用明天皇二年四月新嘗の事へしまる大かたの神  
 代より事おこれり云々又大嘗會便蒙に抑新嘗といふ事  
 ハ云々天照大神の新嘗と見えたり是初なりされと是ハ  
 みつからきこしめと斗にて祭にはあらず云々仁徳天皇  
 四十年ふ當新嘗之月以宴會日賜酒とある是初なりと云  
 置ましかど何れも細しかるす既日本紀ふ當新嘗時と  
 ありて又天照大神在於車上日聞葦原中國有保食神宜爾



月夜尊就候之月夜見尊受勅而降已到干保食神許乃迴首  
嚮國則自口出飯又嚮海則鱮廣鱮狹亦自口出夫品物悉備  
貯之百机而饗之云々是後天照大神復遣天熊人往看之是  
時保食神實已死矣唯有其神之頂化為牛馬願上生栗眉上  
生蠶眼中生稗腹中生稻陰生麥及大小豆天熊人悉取持去  
而奉進之干時天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可食而  
活之也乃以粟稗麥豆為陸田種子以稻為水田種子又因定  
天邑君即以其稻種始殖于天狹田及長田其秋垂穎八握莫  
々然甚快也とある御傳を慎て按るに天照大神御自所聞  
食給ひのみにあらざ蒼生の食て活べき物ぞと多く  
歡喜給ひし大御心より彼保食神に報賽の御祭仕奉り給  
ひしと疑なし何を以て荷田大人へみりからきこしめは

斗にて祭よのあらすなど云れしにやそへともあれ此の  
祭典へ畏くも天照大御神の天上に於て御自親よ行給ひ  
しは權輿しそを皇御孫命よ傳給ひし祭義ふして御歴代  
の天皇御世の始の大嘗へ更なり年毎よも御政事の第一  
として受行ひ給ふ御儀式をかし大嘗祭を邇々藝尊の大  
御代よ行ひ給ひしと云其徴へ中臣壽詞よ皇孫尊云々天  
都御膳遠乃長御膳乃遠御膳止云々由庭爾所知食止事依  
志奉氏天降之後爾中臣遠都祖天兒屋根命皇御孫尊乃御  
前爾仕奉氏天忍雲根神遠天乃二上仁奉上氏神漏岐神漏  
美命乃前仁受給波里申仁皇御孫尊乃御膳都水波宇都志  
國乃水爾天都水乎加氏奉牟止申世止事教給志爾依氏天  
忍雲根神天乃浮雲爾乘氏天乃二上仁上坐氏神漏岐神漏



美命乃前爾申世波天乃玉櫛遠事依奉氏此玉櫛遠刺立氏  
 自夕日至朝日照萬氏天都詔戸乃太詔刀言遠以氏告禮如  
 此告波麻知波弱蒜仁由都五百篋生出牟自其下天乃八井  
 出牟此遠持天天都水止所聞食止事依奉支云々とあるに  
 て詳なり又本祭に獻らん幣帛ハ忌火の御食と始め新稻  
 を以て醸したる黒き白きの御酒の他海川山野の雑々  
 の物ハ有にまかせて奉るへし忌火の御食の高橋氏政事要畧  
 雁命七十二年秋八月受病同月云々引載たる高橋氏文乃六  
 新管乃祭毛勝職御膳乃事毛雁命乃勞始成流所奈利云  
 々任奉り六雁命ハ膳臣遠祖に儀式宣命に今日波新  
 職乃相乃し人なり又黒酒白酒の儀式宣命に今日波新  
 管乃相乃し人なり又黒酒白酒の儀式宣命に今日波新  
 是以黒伎白伎御酒云々とあり故又本祭の主義と按るに祈  
 年祭に乞祈奉りし隨爾五穀を始め百姓の作と作る物と  
 成幸へ給ひし天神地祇の御恩頼と熹み辱み報賽として

今年の初穂と獻る義にハあれと來年の豊稔とも合せて  
 祈奉る義ぞかし因云新年祭の條引る孟冬祈來年合す  
 べし又云年中行事の哥合月次祭に夏の哥のれ年の終り月  
 毎の報賽の爲に行事の神の幣帛とある哥のれ年の終り月  
 祭も報賽の爲に行事の神の幣帛とある哥のれ年の終り月  
 事たるを辨知そべし扱本祭ハ前條に述るか如く天下  
 萬民の一日片時もなくてかなはぬ五穀を成幸ひ給ひし  
 大神達に報賽の神事なれば各社に於て執行の時ハなる  
 へく懇懃に仕奉るべし

祝詞

此乃所乃底津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氏天  
 乃御蔭日乃御蔭止定奉氏稱言竟奉留某乃大神乃御前乎  
 始奉里天津御神八百萬國津御神八百萬乃大神等乃宇頭  
 乃大前爾官位姓名等恐美恐美毛稱言竟奉久止白須



言卷毛畏加禮村大神等乃御魂幸惠幸閉給我故爾天下乃  
百姓乃取作禮留與津御年乎始氏粟田豆田麥稗波更奈利  
草乃片葉爾至麻氏爾惡風荒水乃災無久秋乃垂穗乃八束  
穗止伊登宇流波志久實里都故是乎以氏大神等乃廣伎厚  
伎御恩賴乎憲美辱美氏此月今日乎生日乃足日止齋定氏  
新嘗乃御祭仕奉牟止獻留幣帛波新稻乎以氏齋釀多留黑  
酒白酒乎饗乃開高知饗乃腹滿雙大野原爾生物波甘菜辛  
菜青海原爾住物波鱈乃廣物鱈乃狹物與津毛波邊津毛波  
爾初穗乎婆千穎八百穎爾橫山乃如久置足波志氏進留此  
乃幣帛乎安幣帛乃足幣帛止平久安久所聞食氏皇御孫命  
乃大御世乎手長乃大御世止堅磐爾常磐爾伊賀志御世爾  
幸給閉又大神乃敷坐留此鄉乃里乃禰男女等諸乃咎過將

在乎婆見直志聞直志給比氏夜乃守日乃守爾守給比矜給  
閉止四時物膝折伏宇事物頸根突拔氏稱言竟奉久止白須  
神嘗祭

神嘗祭ハ伊勢内外の大宮に鎮座坐天照大御神豐受姫大神  
達の御前に新稻と以て醸造たる御酒御食等と獻る神事な  
りそを大神達の嘗給ふ義なるを以て神嘗祭とは云ふなり  
此祭典のと延喜式に神嘗祭九月十一日とあり又神祇令  
に季秋神嘗祭同義解に謂神衣祭日便即祭之また類聚國  
史に元正天皇養老五年九月乙卯天皇御内安殿遣使供幣  
帛於伊勢太神宮並以皇太子女井上王爲齋内親王とあり  
又續日本紀に桓武天皇延暦九年九月甲辰奉伊勢太神宮  
相嘗幣帛直付使者矣此に甲辰とあるは庚辰の訛ならん  
延暦九年八月乙未朔なる由同紀



に見えたり然九月甲子朔たり依て算るに九月中に  
 甲辰の日なし殊に庚辰の十七日に當りて太神宮神嘗の  
 式日なれ抑此祭典の天下萬民の一日片時も無ては得あ  
 らぬ飲食衣服の素たる五穀と始め牛馬蠶桑等を生成給  
 ひし豊受姫大神又天上に於て五穀と作初給ひ養蠶の業  
 を始給ひ機織の道を教給ひしは更なり萬物と惠幸閉給  
 ふ天照大御神二柱の神恩に報賽し給はんと毎歳九月十  
 一日天皇内安殿に出御し給ひて御遙拜在せらき奉幣使  
 と立さ勢られ十六日度會宮十七日太神宮へ奉獻せらる  
 御儀式なり依て各地方の神社に於ても本日遙拜式を  
 執行し二柱の大御神の御恩頼の萬分の一に報酬し奉る  
 べし二柱の大御神の五穀を惠幸ひ給ふとの徴は新嘗祭  
 が大御神に嘗引る日本紀の文に據て辨知すべし又二柱の祭  
 が如く殊更に衣食住を掌り給ふ大御神なれば也又遙拜

のと既式部寮選定の儀式  
 をあれば別に記載せそ

遙拜祝詞

神風乃伊勢國拆鈴五十鈴原乃底津石根爾大宮柱太敷立  
 高天原爾千木高知氏靜宮止鎮座坐須天照大御神乃御前  
 外宮乃度會乃山田原乃底津石根爾稱言竟奉留豐受姫大  
 御神乃御前及二宮乃相殿爾座須大神等枝宮枝社乃神等  
 乃御前乎毛慎美敬比畏美畏美毛遙爾拜美奉久止白須  
 毎年乃例止志豆天皇我大朝廷與里進給布新稻乃大幣帛  
 波在村此乃郷回乃里人等毛大神達乃廣伎厚伎大御惠爾  
 依豆年穀乃豐熟爾實禮留事乎憲美辱美氏報賽乃心波加  
 里乃禮代止今日志毛獻留此乃幣帛乎安幣帛乃足幣帛止  
 平久安久所聞食氏畏加禮村皇御孫命乃大御壽乎手長乃



御壽止湯津磐村乃如久堅磐爾常磐爾守幸閉給比豆阿禮  
坐皇子達親王等乎毛惠幸閉給比及百宮人等天下四方國  
乃百姓等爾至万氏爾平久安久護惠幸閉給倍止畏美畏美  
毛白須

祭典畧解上之卷終



